



令和5年度

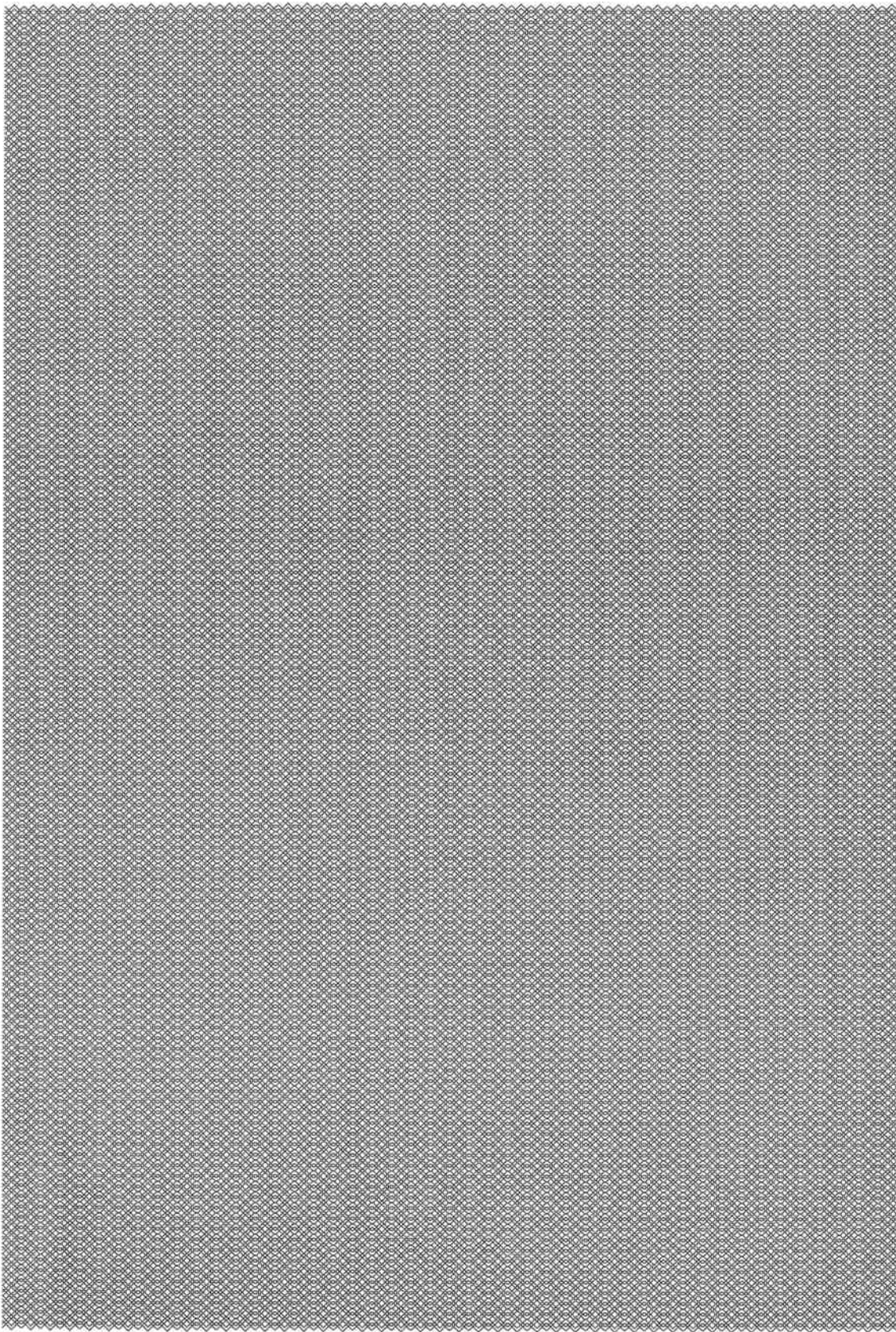
国語

第1回

注 意

1. 指示があるまで、この問題用紙を開いてはいけません。
2. 答えはすべて解答用紙に記入しなさい。
3. 受験番号は、算用数字で分かりやすくはっきりと書きなさい。
氏名にはふりがなを忘れないこと。
4. 私語、用具類の貸し借りは禁止します。
5. 試験終了後も指示があるまで席をはなれてはいけません。
6. 質問があるときは、静かに手をあげなさい。
7. 解答用紙のみ提出しなさい。問題用紙は持ち帰りなさい。
問題用紙の余白は下書きに利用してかまいません。
8. 文字は濃くていねいに大きく書きなさい。消しゴムを使ったあとは余計な点や線などの消し残しがないかよく確認した上で書きなさい。

受験番号					ふりがな	
					氏 名	



一

次の――線部の漢字の読みをひらがなで答えなさい。

- 1 湯治に出かける。
- 2 彼に一矢報いるつもりだ。
- 3 発汗作用のある食べ物。
- 4 幼少時代の面影が残る。
- 5 厳かな式典に出席する。

二

次の――線部のカタカナを漢字に直しなさい。

- 1 大統領のゴクヒ来日が決まった。
- 2 新商品をコウアンする。
- 3 チキを頼って上京する。
- 4 日本の名所をタンボウする。
- 5 ナゴやかに話し合う。

次の①～⑤は、年賀状の一部を表したものです。――線部が表している動物を用いて作成できる四字熟語やことわざ、故事成語を次の記号群から選び、それぞれ記号で答えなさい。

(例)

卯＝ウサギ

二 兎 を追う者は一 兎 をも得ず

↓ 正解 ア

謹賀新年

二〇二三年 卯

①

迎春

二〇二五年 未

②

賀正

令和二年 子

③

あけまして

おめでとうございます

平成十六年 申

④

謹んで新春のお慶びを

申し上げます

昭和五十二年 巳

⑤

謹んで新年のご挨拶を

申し上げます

一九七〇年 戌

【記号群】

ア 二 を追う者は一 をも得ず

ウ 飼い に手をかまれる

オ 生き の目を抜く

キ も木から落ちる

ケ 鬼が出るか が出るか

サ にひかれて善光寺参り

イ 突猛進

エ 画 点晴

カ 窮 猫を噛む

ク の尾を踏む

コ 頭狗肉

シ 鳴狗盗

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

生まれて初めて、一人でバスに乗った。

家族でデパートに買い物に行くときに、いつも使う路線だ。ものごろついた頃から、月に一度は乗っていた。五年生になってからは親と一緒にいるところを友だちに見られるのが嫌だったので、バス停でも車内でも、わざと両親と離れて——一人で乗っていた。

だから、だいじょうぶだ、と思っていた。だいじょうぶじゃないと困るんだ、とも自分に言い聞かせていた。もう五年生の二期なんだから。同級生の中には、バスどころか電車にも一人で乗って進学塾に通っているヤツもたくさんいるんだから。

でも、いままでの「一人」と今日の「一人」は違っていた。『本町一丁目』のバス停に立っているときから緊張で胸がどきどきして、おしっこをがまんしすぎたあのように、下腹が落ち着かない。

やっとバスが来た。後ろのドアから乗り込んで、前のドアから降りる。手順はすっかり覚え込んでいるはずだったのに、整理券を取り忘れそうになった。

『本町一丁目』の整理券番号は7。運転席の後ろにある運賃表で確かめると、整理券番号19の『大学病院前』までは、子ども料金で百二十円だった。家族で買い物に行くときは、いつも17番の『銀天街入り口』で降りる。子ども料金は百円。四年生までは、バスに乗り込むとすぐに整理券を母に渡し、母が少年のぶんもまとめて運賃箱に小銭を入れていた。五年生になってからは、バスに乗る前に百円玉を一つ渡されていた。^①「落としても、お母さん、知らないからね」といたずらっぽく笑う母の顔を思い出した。二人掛けのシートの肩の部分にある取っ手を、強く握り直した。

バスはスピードを上げたかと思うと、すぐにバス停に停まる。そのたびに少年は停留所の名前を確かめて、『大学病院前』まであといくつ、と頭の中で数字を書き換える。降車ボタンを押しそびれてはいけない。整理券をなくしてはいけない。運賃箱の前で

もたもたしてはいけない。財布から取り出すときにお金を落としてはいけない。いまのうちに出しておこうか。百円玉一つに、十円玉二つ——コインが一つから三つに増えただけで、握り込んだ手のひらに力をグツと込めないとお金が落ちそうな気がする。

バスは中洲のある川に架かった橋を渡って、市街地に入る。西にかたむいた太陽が街ぜんたいを薄いオレンジ色に染めている。

次は大学病院前、大学病院前、と車内アナウンスが聞こえた。お降りの方はお手近のボタンを押して……とつづく前に、ボタンを押した。急いで通路を前に進み、バスがまだ走っているうちに運賃箱のそばまで来た。

「停まってから歩かないと」

運転手に強い声で言われた。「転んだらケガするし、他のひとにも迷惑だろ」——まだ若い運転手は、制帽を目深にかぶって前をじっと見つめたまま、少年のほうには目も向けなかった。

② 数日後、父からバスの回数券をもらった。「十回分で十一回乗れるから、こっちのほうが得なんだ」——十一枚綴りが、二冊。

「だいじょうぶだよ」父はコンビニエンスストアの弁当をレンジに入れながら、少年に笑いかけた。「これを全部使うことはないから」

「ほんと？」

「ああ……まあ、たぶん、だけど」

足し算と割り算をして、カレンダーを思い浮かべた。再来週のうちに使いきる計算になる。

「ほんとに、ほんと？」

低学年の子みたいにしつこく念を押した。父は怒らず、かえって少し申し訳なさそうに「だから、たぶん、だけどな」と言った。電子レンジが、チン、と音をたてた。

③ 「よし、ごはんだ、ごはん。食べるぞっ」

父は最近おしゃべりになった。なにをするにもいちいち声をかけてくるし、ひとりごとや鼻歌も増えた。お父さんも寂しいんだ、と少年は思う。

回数券の一冊目を使いきる頃には、バスにもだいふ慣れてきた。

「毎日行かなくてもいいんだぞ」

父に言われた。「宿題もあるし、友だちとも全然遊んでないだろう？ 忙しいときや友だちと遊ぶ約束したときには、無理して行かなくてもいいんだからな」——それは病室で少年を迎える母からの伝言でもあった。

母は自分の病気より、少年のこのほうをずっと心配していた。自転車でお見舞いに行きたくても、交通事故が怖いからだめだと言われた。バスで通っていても、病室をひきあげるときには必ず「降りたあと、すぐに道路を渡っちゃだめよ」と釘を刺されるのだ。

「だいじょうぶだよ、べつに無理してないし」

少年が笑って応えようと、父は少し困ったように「まだ先は長いぞ」とつづけた。「昼に先生から聞いたんだけど……お母さん、もうちょつとかかりそうだって」

「……もうちょつと、つて？」

「もうちょつとは、もうちょつとだよ」

「来月ぐらい？」

「それは……もうちょつと、かな」

「だから、いつ？」

父は少年から目をそらし、「医者じゃないんだから、わからないよ」と言った。

二冊目の回数券が終わった。使いはじめるとあつけない。一往復で二枚ずつ——一週間足らずで終わってしまう。

まだ母が退院できそうな様子はない。

「回数券はバスの中でも買えるんだろ。お金渡すから、自分で買うか？」

「……一冊でいい？」

ほんとうは訊きたくない質問だった。父も答えづらそうに少し間をおいて、「面倒だから二冊ぐらい買っとくか」と妙におどけた口調で言った。

④「定期券にしないでいい？」

「なんだ、おまえ、そんなのも知ってるのか」

「そっちのほうが回数券より安いんでしょ？」

定期券は一カ月、三カ月、六カ月の三種類ある。父がどれを選ぶのか、知りたくて、知りたくなくて、「定期つて長いほうが得なんだよね」と言った。

「ほんと、よく知ってるんだなあ」父はまたおどけて笑い、「まあ、五年生なんだもんな」とうなずいた。

「……何カ月のにする？」

「お金のことはアレだけど……回数券、買っとけ」

父はそう答えたあと、「やっぱり三冊ぐらい買っとくか」と付け加えた。

次の日、バスに乗り込んだ少年は前のほうの席を選び、運転席をそっと覗き込んだ。あのひとだ、とわかると、胸がすばまった。初めてバスに一人で乗った日に叱られた運転手だった。その後も何度か、同じ運転手のバスに乗った。まだ二冊目の回数券を使

いはじめたばかりの頃、整理券を指に巻きつけて丸めたまま運賃箱に入れたら、「数字が見えないとだめだよ」と言われた。叱る口調ではなかったが、それ以来、あのひとのバスに乗るのが怖くなった。たとえなにも言われなくても、運賃箱に回数券と整理券を入れてバスを降りるとき、いつもムスツとしているように見える。

嫌だなあ、運が悪いなあ、と思ったが、回数券を買わないわけにはいかない。『大学病院前』でバスを降りるとき、「回数券、ください」と声をかけた。

運転手は「早めに言ってくれないと」と顔をしかめ、足元に置いたカバンから回数券を出した。制服の胸の名札が見えた。「河野」と書いてあった。

「子ども用のでいいの？」

「……はい」

「いくらのやつ？」

「……百二十円の」

河野さんは「だから、そういうのも先に言わないと、後ろつつかえてるだろ」とぶっきらぼうに言つて、一冊差し出した。「千二百円と、今日のぶん、運賃箱に入れて」

「あの……すみません、三冊……すみません……」

「三冊も？」

「はい……すみません……」

大きくため息をついた河野さんは、「ちょっと、後ろのお客さん先にするから」と少年に脇にどくよう顎を振った。

少年は頬を赤くして、他の客が全員降りるのを待った。お父さん、お母さん、お父さん、お母さん、と心の中で両親を交互に呼んだ。助けて、助けて、助けて……と訴えた。

客が降りたあと、河野さんはまたカバンを探り、追加の二冊を少年に差し出した。

代金を運賃箱に入れると、「かよってるの？」と、さっきよりさらにぶっきらぼうに訊かれた。「病院、かようんだったら、定期のほうが安いぞ」

わかつている、そんなの、言われなくたって。

「……お見舞い、だから」

かぼそい声で応え、そのまま、逃げるようにステップを下りて外に出た。全然とんちんかな答え方をしていたことに気づいたのは、バスが走り去ってから、だった。

夕暮れが早くなった。病院に行く途中で橋から眺める街は、炎が燃えたつような色から、もっと暗い赤に変わった。帰りは夜になる。最初の頃は帰りのバスを降りるときに広がっていた星空が、いまはバスの中から眺められる。病院の前で帰りのバスを待つとき、いまはまだかろうじて西の空に夕陽が残っているが、あとしばらくすれば、それも見えなくなってしまうだろう。

買い足した回数券の三冊目が——もうすぐ終わる。

少年は父に「迎えに来て」とねだるようになった。車で通勤している父に、会社帰りに病院に寄ってもらって一緒に帰れば、回数券を使わずにすむ。

「今日は残業で遅くなるんだけどな」と父が言っても、「いい、待ってるから」とねばった。母から看護師さんに頼んでもらって、面会時間の過ぎたあととも病室で父を待つ日もあった。

それでも、行きのバスで回数券は一枚ずつ減っていく。最後から二枚目の回数券を——今日、使った。あとは表紙を兼ねた十一枚目の券だけだ。

明日からお小遣いでバスに乗ることにした。毎月のお小遣いは千円だから、あとしばらくはだいじょうぶだろう。

ところが、迎えに来てくれるはずの父から、病院のナースステーションに電話が入った。

「今日はどうしても抜けられない仕事が入っちゃったから、一人でバスで帰って、って」

看護師さんから伝言を聞くと、泣きだしそうになってしまった。今日は財布を持って来ていない。回数券を使わなければ、家に帰れない。

母の前では涙をこらえた。病院前のバス停のベンチに座っているときも、必死に唇を噛んで我慢した。でも、バスに乗り込み、最初は混み合っていた車内が少しずつ空いてくると、急に悲しみが胸に込み上げてきた。シートに座る。窓から見えるきれいな真ん丸の月が、じわじわとにじみ、揺れはじめた。座ったままうずくまるような格好で泣いた。バスの重いエンジンの音に紛らせて、うめき声を漏らしながら泣きじゃくった。

『本町一丁目』が近づいてきた。顔を上げると、車内には他の客は誰もいなかった。降車ボタンを押して、手の甲で涙をぬぐいながら席を立ち、ウインドブレーカーのポケットから回数券の最後の一枚を取り出した。

バスが停まる。運賃箱の前まで来ると、運転手が河野さんだと気づいた。それでまた、悲しみがつのった。こんなひとに最後の回数券を渡したくない。

整理券を運賃箱に先に入れ、回数券をつづけて入れようとしたとき、とうとう泣き声が出てしまった。

⑦「どうした？」と河野さんが訊いた。「なんで泣いてるの？」——ぶっきらぼうではない言い方をされたのは初めてだったから、逆に涙が止まらなくなってしまった。

「財布、落としちゃったのか？」

泣きながらかぶりを振って、回数券を見せた。

じゃあ早く入れなさい——とは、言われなかった。

河野さんは「どうした？」ともう一度訊いた。

その声にすうつと手を引かれるように、少年は鳴咽^{おえつ}交じりに、回数券を使いたくないんだと伝えた。母のこともしゃべった。新しい回数券を買うと、そのぶん、母の退院の日が遠ざかってしまう。ごめんなさい、ごめんなさい、と手の甲で目元を覆った。警察に捕まってもいいから、この回数券、ぼくにください、と言った。

河野さんはなんとも言わなかった。かわりに、小銭が運賃箱に落ちる音が聞こえた。目元から手の甲をはずすと、整理券と一緒に百二十円、箱に入っていた。もう前に向き直っていた河野さんは、少年を振り向かず、「早く降りて」と言った。「次のバス停でお客さんが待ってるんだから、早く」——声はまた、ぶっきらぼうになっていた。

次の日から、少年はお小遣いでバスに乗った。お金がなくなるか、「回数券まだあるのか？」と父に訊かれるまでは知らん顔しているつもりだったが、その心配は要らなかった。

三日目に病室に入ると、母はベッドに起き上がって、父と笑いながらしゃべっていた。会社を抜けてきたという父は、少年を振り向いてうれしそうに言った。

「お母さん、あさって退院だぞ」

退院の日、母は看護師さんから花束をもらった。車で少年と一緒に迎えに来た父も、「どうせ家に帰るのに」と母に笑われながら、大きな花束をプレゼントした。

帰り道、「ぼく、バスで帰っていい？」と訊くと、両親はきょとんとした顔になったが、⑧「病院からバスに乗るのもこれで最後だもんなあ」「よくがんばったよね、寂しかったでしょ？　ありがとう」と笑って許してくれた。

「帰り、ひよっとしたら、ちょっと遅くなるかもしれないけど、いい？　いいでしょ？　ね、いいでしょ？」

両手で拝んで頼むと、母は「晩ごはんまでには帰ってきなさいよ」とうなずき、父は「そうだと、今夜はお寿司とるからな、パー

ティーだぞ」と笑った。

バス停に立つて、河野さんの運転するバスが来るのを待った。バスが停まると、降り口のドアに駆け寄って、その場でジャンプしながら運転席の様子を確かめる。

何便もやり過ぎて、陽が暮れてきて、やっぱりだめかなあ、とあきらめかけた頃——やっと河野さんのバスが来た。間違いない。運転席にいるのは確かに河野さんだ。

車内は混み合っていたので、走っているときに河野さんに近づくことはできなかった。^⑨それでもいい。通路を歩くのはバスが停まってから。整理券は丸めてはいけない。

次は本町一丁目、本町一丁目……とアナウンスが聞こえると、降車ボタンを押した。ゆっくりと、人差し指をピンと伸ばして。バスが停まる。通路を進む。河野さんはいつものように不機嫌な様子で運賃箱を横目で見ていた。

目は合わない。それがちよつと残念で、でも河野さんはいつもこうなんだもんな、と思い直して、整理券と回数券の最後の一枚を入れた。

降りるときには早くしなければいけない。順番を待っているひともいるし、次のバス停で待っているひともいる。

だから、少年はなにも言わない。回数券に書いた「ありがとうございました」にあとで気づいてくれるかな、気づいてくれるといいな、と思いながら、ステップを下りた。

バスが走り去ったあと、空を見上げた。西のほうに陽が残っていた。どこから聞こえる「ごはんできたよお」のお母さんの声に応えるように、少年は歩きだす。

何歩か進んで振り向くと、車内灯の明かりがついたバスが通りの先に小さく見えた。やがてバスは交差点をゆっくりと曲がって、消えた。

(重松清『バスに乗って』より)

問一——線部①『落としても、お母さん、知らないからね』といったずらつぽく笑う』とありますが、この時の母の気持ちとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 背伸びをしている少年がかわいらしく、からかいたい。

イ 少年が親離れしていくことがつらく、その気持ちを隠したい。

ウ 少しずつ自立していく少年が頼もしく、精一杯応援したい。

エ 困惑している少年の表情を見て、不安になりつつも強がりたい。

オ 簡単なことに緊張する少年が情けなく、励ましたい。

問二——線部②『だいじょうぶだよ』とありますが、父は少年のどのような思いにそう答えているのでしょうか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 十一枚綴りの回数券を二冊も買ったことで、余計な出費がかさむことを心配する思い。

イ 回数が多いことを前提とした父の言動に、母の入院が長引くことを心配する思い。

ウ コンビニエンスストアの弁当ばかりが続くことに、食生活の偏りを心配する思い。

エ 母の入院が長引くことがわかり、回数券の枚数がこれで足りるかどうかを心配する思い。

オ 母が入院してから、ひとりごとや鼻歌が増えた父のことを心配する思い。

問三 ―線部③『よし、ごはんだ、ごはん。食べるぞっ』とありますが、この言葉を発した時の父についての説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 母の容態を心配する息子を安心させるためとはいえ、自分がついた嘘を信じる息子を見ているのが辛く、話をそらそうとしている。

イ 仕事帰りで疲れきっている中、少しでも早く食事にするための準備をしているのに、毎日同じ事を聞く息子に若干の嫌気をおぼえている。

ウ 何の確証もないのに妻の退院時期についていいかげんな返答をしたことで、息子が自分に不信感を抱いてしまったことを後悔している。

エ 母の退院時期を何度も確認する息子への答えに窮しながら、電子レンジの音をきっかけにして質問を打ち切り、話題を変えようとしている。

オ 電子レンジの無機質な音に、妻が不在のあいだの食事の味気なさを感じているものの、息子には気づかれまいと強がっている。

問四 ―線部④『定期券にしないでいい?』とありますが、少年はなぜそう言ったのでしょうか。その理由として最も適当なものの中から選び、記号で答えなさい。

ア 母の入院がどのくらい長引きそうか、遠回しに確かめたかったから。

イ 回数券よりも定期券の方が、費用がかからないことを知っていたから。

ウ 母の入院に対して、妙におどけた態度をとる父が不愉快だったから。

エ 定期券の存在を知っていることを示して、父を見返したかったから。

オ 母の入院が長引き、父にお金の苦労が増えることを心配したから。

問五 ―線部⑤「全然とんちんかな答え方」とありますが、この説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 河野さんは、少年が病気であるために病院に通っていると思っているから、少年の「お見舞いだから」という答えは、河野さんを混乱させてしまうということ。

イ 河野さんは、少年がお見舞いのために病院に通っていると知っているから、少年の「お見舞いだから」という答えは、河野さんにはわかりきったことであるということ。

ウ 河野さんは、少年が何のために病院へ通っているかを尋ねたのに、少年の「お見舞いだから」という答えは、河野さんの質問に対する答えとしてふさわしくないということ。

エ 河野さんは、回数券の販売が面倒なのに、少年の「お見舞いだから」という答えは、また回数券を買うかもしれないという意味で河野さんの機嫌を悪くするということ。

オ 河野さんは、病院へ通うのなら定期券の方がいいと勧めてくれたのに、少年の「お見舞いだから」という答えは、定期を買わなくてよい理由になっていないということ。

問六 ―線部⑥「回数券を使わずにすむ」とありますが、なぜ回数券を使いたくないのでしょうか。その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 慣れない回数券を使うとまた運転手さんに怒られる事態となるのではないかと恐れているから。

イ 父にバス代を払わせすぎること引け目を感じ、自分のお小遣いでどうにかしようと思ったから。

ウ 寂しさを感じている少年にとって、父と一緒に帰ることは気を紛らわせることになるから。

エ 回数券を使い切って新しい回数券を買えば、その分だけ母の退院が遅くなるように感じたから。

オ 最後の一枚の回数券は母の退院の日に使うと自分の中で勝手に決めてしまったから。

問七 ―線部⑦「逆に涙が止まらなくなってしまった」とありますが、なぜだと考えられますか。その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 回数券を入れずにたたく自分のことを無愛想な口調で責めると思っていたが、思いがけない河野さんの対応に気持ちが緩んでしまったから。

イ 普段は他の客も乗っているので自分に冷たい口調で対応する河野さんだが、今は他に誰も乗っていないので泣いても叱られないと思ったから。

ウ なかなかバスから降りようとしなかった自分のことを叱るだろうと覚悟していたが、いつもと変わらぬ河野さんの対応に安堵したから。

エ いきなりバスの車内で泣き始めて他の客を困惑させたが、泣き止むまで声をかけず待っていてくれる河野さんの優しさに触れたから。

オ 運賃箱の前で手間取る自分に素っ気ない態度で接すると考えていたが、いつもと違う優しい対応を見せる河野さんを不気味に思ったから。

問八 ―線部⑧「両親はきよとした顔になった」とありますが、なぜでしょうか。その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア あれほど嫌がっていたバスに乗りたがる少年の心の変化が理解できなかったから。

イ 車で病院に来ているのにわざわざバスに乗りうとする少年の意図がつかめなかったから。

ウ お世話になったバスの運転手さんにお礼を言おうとする少年の成長に驚いたから。

エ 少年がバスの運転手さんと心温まる交流をしていることに喜びを感じたから。

オ 自分一人でも帰れるところを母に見せようとする少年の健気さに感心したから。

問九 ―線部⑨「それでもいい」とありますが、この部分から読み取れる少年についての説明として**適当でないもの**を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 河野さんから注意を受けたことで、乗車マナーを守ることの大切さを学び一歩成長した。

イ 河野さんに感謝の意を伝えるためだからと言って、乗車マナーを破ることは許されないと理解した。

ウ 乗車マナーを守っている姿を見せることで、河野さんに感謝の意を示したいと考えている。

エ たとえ乗車マナーを破る結果となっても、何とかして河野さんに感謝の意を直接伝えたいと願っている。

オ 直接感謝の意が伝えられなくても、河野さんの運転するバスに乗車することができて嬉しく思っている。

問十 この小説の舞台は何月から何月くらいに変化したと考えられますか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 三月↓五月

イ 六月↓八月

ウ 九月↓十一月

エ 十二月↓二月

問十一 〓線部 a 「胸がすばまった」、b 「頬を赤くして」とありますが、この時の少年を表す言葉の組み合わせとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア a おじけづく

b 当惑する

イ a びっくりする

b 腹を立てる

ウ a 不安になる

b やけになる

エ a おちつく

b 興奮する

オ a 強がる

b めんくろう

問十二 次の五人の発言の中で、本文の内容について間違ったことを話している生徒を一人選び、記号で答えなさい。

Aさん 「会話を多く用いることで場面ごとの臨場感や登場人物の人柄が伝わる作品だなあ。特に会話の『……』が、言葉に

出来ない思いや様々な状況を効果的に表しているんじゃないかな。」

Bさん 「少年がバスの運転手さんである河野さんに注意を受けたことで、他の客にも気を配れるようになっていったのがいいよね。最後は一人で自信をもってバスを降りていったのが印象的だったなあ。」

Cさん 「河野さんは状況に応じて柔軟に対処できる人だと思うよ。それに、子どもに対してもバスの乗り方をしっかりと伝えるプロ意識を持っているね。」

Dさん 「僕は夕暮れがすごく印象的だった。だんだん陽が暮れるのが早くなるという描写が、なかなか退院できないお母さんの状況と、少年の寂しい心をうまく表現していると思った。一方で、まだ陽が残っている時間の設定を最後の場面で描いて、これからはお母さんが家にいてくれる安心感を表現したんだね。」

Eさん 「河野さんに何度も叱られるきつかけとなった回数券だけど、最後は河野さんへのお礼の手紙になるところがすごいなと思った。お母さんと少年をつないだ回数券が、最後は河野さんと少年をつないだんだね。」

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

コペルニクスの時代、天文学の世界には絶対的な教科書ともいえる本がありました。

紀元2世紀に古代ローマの天文学者・プトレマイオスが著した『アルマゲスト』という専門書です。全13巻からなるこの大著のなかでプトレマイオスは、天動説を数学的に説明し、その考えは1000年以上にわたって支持されてきました。

しかし、そもそも天動説は間違った考えです。現在の科学の目で見れば、デタラメです。その天動説をむりやり数学的に説明していたのですから、そこにはどうしても無理があります。強引なところ、矛盾したところ、うまく説明できないところがあります。^①ポーランドに戻り、時間を見つけては天体観測をおこなっていたコペルニクスは、その矛盾を見逃しませんでした。

天動説を数学的に証明しようとする、どうしても無理が出る。太陽も金星もその他の惑星も、ありえないほど複雑な動きをしてようやく、天動説の理論は成り立つ。みんなはそれで納得しているけれど、どこかおかしいんじゃないか？

本来宇宙とは、もっとシンプルな法則に従って動いているはずだ。もし、全知全能の神がこの宇宙をつくったというのなら、こんな不格好な動きにするはずがない。もっと美しく、もっと自然な動きをしているはずだ。

そうやって地道な天体観測を続け、さまざまな検討を重ねた結果、コペルニクスはある結論にたどり着きます。

暗くて広い部屋があったとき、人々は部屋の中央にランプを置くだろう。そうすれば、部屋の隅々までをいちばん効率よく照らすことができるからだ。部屋の隅にランプを置いたり、あちこちに移動させることはしない。

宇宙の中心にあるのは、地球ではない。光り輝く太陽こそが、中心なのだ。

地球は、太陽のまわりを1年かけて回っている。水星は3ヵ月、金星は225日、火星は687日かけて、それぞれ太陽のまわりを回っている。

太陽を中心に考えた瞬間、星々の動きは驚くほどシンプルで、美しいものになる。天動説にあったような、不自然な動きをさせなくてすむ。

地動説の完成であり、「太陽系」が誕生した瞬間です。

これはみなさんも同じでしょうが、「地球はものすごいスピードで太陽のまわりを回っている」という話は、感覚としてうまく理解できないところがあります。動いている実感なんてないし、もしもそんなに速く動いているのなら、鳥は空を飛ぶこともできない。当時の人も、そう思っていました。

しかしコペルニクスは、そういう「自分の感覚」さえも疑い、天体観測のデータと、計算式を信じたのです。それも学問の都から遠く離れた、ポーランドの地方都市で。^②むしろ、周囲の雑音が聞こえない「辺境」の地にいたからこそ、定説を疑うことができたのかもしれない。

こうして、世界の常識をひっくり返すほどの大発見をしながら、コペルニクスは自分の「地動説(太陽中心説)」を大々的に発表することはありませんでした。理論の概要をまとめた小冊子を、数人の仲間たちに配っただけで、30年以上も沈黙を守ったのです。

^③ いったいなぜ、コペルニクスは「地動説」を発表しなかったのでしょうか？

彼が沈黙を守った理由は、いくつか挙げられます。

これだけ過激な説を唱えるからには、数学的な理論だけでは意味がない、というのがコペルニクスの考えでした。

天動説を唱えるプトレマイオスの『アルマゲスト』には、具体的な観測データがあまり載っていません。自分の理論を証明するには、詳細な観測データもセットにしなければならぬ。決定的な「事実」を突きつけないと、誰も賛同してくれない。いや、それ以前に価値ある書物にならない。……ナイチンゲールが地道に統計データを集めていったのと、まったく同じ理屈です。

しかしこれは、気が遠くなるような話でもあります。土星が太陽のまわりを1周するには、およそ30年もの年月がかかります。太陽系のすべて（当時はまだ天王星と海王星が発見されていませんでした）を観測し、「事実」をベースに説明しようとするれば、30年分の観測データが必要なのです。ポーランド北部で司祭としての仕事をこなしながら、コペルニクスは黙々と観測を続けていきました。

じゃあ、30年分の観測データさえ揃えてしまえば、堂々と発表できるのでしょうか？

……そんなことはありません。聖書のなかには、神が大地の土台をいつまでも動かないように置いた、という話が出てきます。要するに地動説は、世間の常識に逆らうだけでなく、神にも逆らうような暴論だったのです。

仲間たちや弟子からは、「ぜひ本を出版して、地動説を発表するべきだ」と勧められていましたが、コペルニクスはなかなか同意しません。そして周囲の説得を受け入れ、ようやく出版を決意したのは、最初に小冊子をつくってから30年が過ぎたときのことでした。このときコペルニクスは、ローマ教皇のパウロ3世に手紙を送りました。その手紙のなかで彼は、およそこんな内容の告白をしています。

「わたしの考えを世に出すべきかどうか、長らく迷っておりました。なぜなら、地球が動くという大胆な考えが、人々にどう受け止められるか、予想がつかなかったからです。でも、わたしの考えは教会に反対するようなものではなく、教皇聖下の統治する教会全体の利益にかなうことだと信じています」

コペルニクスの時代、地動説を唱えることがどれだけ勇気のいる行為だったか、なんとなく伝わってくるのではないのでしょうか。

しかし、幸か不幸かコペルニクスは、地動説をまとめた著書『天体の回転について』の出版直前に、70歳の生涯を閉じることにあります。原稿の内容を最終確認するための、本の試し刷りが上がってきた当日のことでした。

30年以上もの時間をかけて築き上げたみずからの地動説が、社会にどのような影響を与え、どのように受け入れられていったの

か。彼はなにも知らないまま、亡くなってしまったのです。

それでは実際、コペルニクスの『天体の回転について』が出版されたとき、世間の人々はどのような反応を示したのでしょうか？
神を冒瀆ぼうとくしていると、猛反対の嵐が吹き荒れたのでしょうか？

世紀の大発見だと、もてはやされたのでしょうか？

……正解はどちらでもありません。少なくとも数十年のあいだ、彼の著書は世間から完全に無視されました。

これは、コペルニクスの地動説がまだまだ欠点の多いものだったこともあるのですが、最大の理由は別のところにあるともいわれています。じつは『天体の回転について』が刷り上がる直前に、校正者（原稿をチェックする人）が、勝手にこんな内容の序文を加えていたのです。

「地球が動くという考えに、読者はびつくりするべきではない。また、こんなとんでもない考えを述べているからといって、著者を責めるべきではない。著者は、この考えが必然的に正しいと主張しているわけではない。神の啓示を受けたのでない限り、天文学者も哲学者もたしかに結論に至ることはできない。だから読者は、^⑤これをたんなる仮説と受けとってもらっていい。仮説は真理であるとは限らない。観測結果と一致する計算結果を出すだけで十分なのだ」

この序文を書き加えたオジアンダーという人物は、熱心なキリスト教徒で、神学者でもありました。

コペルニクスの弟子はオジアンダーの序文に激怒しましたが、何十年ものあいだキリスト教関係者から批判の声が上がらなかったのは、彼が書き加えたこの序文のおかげだともいわれています。そしてコペルニクスの地動説は、17世紀の天文学者ヨハネス・ケプラー、そして「それでも地球は回っている」の言葉で有名なガリレオ・ガリレイらに受け継がれ、完成しました。

それでは、最後にクイズです。

コペルニクスや仲間たちが恐れた、ローマ教皇庁とカトリック教会。彼らが正式に「地動説」の正しさを認めたのは、いつのことだと思いますか？

……なんと1992年。日本でいえば、平成に入ってからのことです。

アポロ11号が月面着陸し、スペースシャトルが打ち上げられ、宇宙ステーションが運用されてもなお、地動説は認められていなかったのです。

この時間の最初に、『違和感を大事にしてください』という話をしました。そして「疑う力をもってください」という話をしました。^⑥
ナイチンゲール、森鷗外、高木兼寛、そしてコペルニクス。

4人の話を聞いて、「常識を疑った変革者」とはどんな人なのか、そして「常識を信じてしまった旧世代の人」はどんな人にはまったのか、十分理解できたのではないかと思います。

すべてを信じるな、すべてを疑え、とは言いません。いま、みなさんに求められているのは『人を疑うのではなく、コトを疑う力』なのです。

(瀧本哲史『ミライの授業』より)

問一 この文章には次の一文が脱落しています。どこに入れるのが適切でしょうか。入れた場所の直後の五字を書き抜きなさい(句読点・符号も一字とします)。

これは宇宙だって同じである。

問二 ——線部①「そこ」の指す内容を、文中の語句を用いて十字以内で答えなさい。

問三 ——線部②「むしろ、周囲の雑音が聞こえない『辺境』の地にいたからこそ、定説を疑うことができたのかもしれませんが」とありますが、どういうことですか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 車馬の喧騒から離れた山里の静かな環境であったため、思索にふけることができたということ。
イ 都会に比べて不便な地方都市であったため、かえって彼を研究へと奮い立たせたということ。
ウ 学問をするには恵まれない環境であったため、すべて自分ひとりで解決せざるをえなかったということ。
エ 星空の綺麗な田舎で育ったため、自然と星を眺める機会が増え研究に生かすことができたということ。
オ 他の研究者たちの意見に触れる機会の少ない郊外にいたため、固定観念にとらわれなかったということ。

問四 ― 線部③「いったいなぜ、コペルニクスは『地動説』を発表しなかったのでしょうか？」とありますが、発表しなかった理由として適当なものを次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

- ア 苦勞して発見した宇宙の真理を自分だけのものとしたかったから。
- イ 観測から導き出された結果を自分自身でも信じられなかったから。
- ウ 説を公表するのにふさわしい媒体が見つからなかったから。
- エ 世間の人々にどのように受け止められるか予想ができなかったから。
- オ 自分の説には決定的な欠陥があることに気づいていたから。
- カ 自分の説を裏づけるのに十分なデータが集まっていなかったから。
- キ 弟子たちの言いなりになって発表することに不安を感じたから。

問五 ― 線部④「ローマ教皇のパウロ3世に手紙を送りました」とありますが、コペルニクスはどのような意図で手紙を送ったのでしょうか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 自分が司祭であるという立場を利用して、自著を宣伝しようとした。
- イ 説の大胆さへの危惧を自ら示し、反教會的と取られないようにした。
- ウ 利益をもたらすことを強調して、教會内の自分の地位を上げようとした。
- エ どんな常識にもとらわれず、自分の信念を貫く覚悟を伝えようとした。
- オ 教會の賛同を得ることで、なんとか世間の人々を説得しようとした。

問六 ― 線部⑤「これをたんなる仮説と受けとってもらっていい」とありますが、オジアンダーがこの言葉を書いた理由として考えられる最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 地動説を批判することで、自分の才能を誇示しようとしたから。
- イ 地動説が、神や教會の權威に触れることをおそれたから。
- ウ 検証が不十分で、地動説の正しさを保証できなかったから。
- エ 天動説を否定するだけの根拠が乏しく、説得力に欠けたから。
- オ 地動説は矛盾をはらんでおり、コペルニクスの思い込みにすぎなかったから。

問七 本文の内容と**合致しないもの**を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 星によって太陽の周りを一周する時間は異なる。
- イ コペルニクスはキリスト教會と対立せず、慎重に行動しようとした。
- ウ コペルニクスの地動説の発表に対して世間は反応を示さなかった。
- エ コペルニクスは太陽が全ての星々を平等に照らすと考えていた。
- オ 現在、ローマ教皇庁もカトリック教會も地動説の正しさを認めている。

問八 ― 線部⑥「疑う力」とありますが、本文中における「疑う力」とはどのような力でしょうか。六十字以内で説明しなさい。
(句読点・符号も一字とします)。

令和五年度第一回入学試験《国語》解答用紙

受験番号		
氏名	ふりがな	



1	
2	
3	
4	
5	(かな)

一

1	
2	
3	
4	
5	(やか)

二

①	
②	
③	
④	
⑤	

四

問九	問五	問一
問十	問六	問二
問十一	問七	問三
問十二	問八	問四
(さん)		

四

五

[illegible]